

「三陸の歌」の新聞批評

中世に建築された大きな教会での追悼音楽会は凍るような寒さにもかかわらず、多くの聴衆が音楽に聞き入ってくれた。「三陸の歌」が演奏されると、聴衆も演奏家も一体になって津波で亡くなられたかたを偲び、静寂が漂った感動的な夕べだった。

リュベッカー新聞 2013年3月23日

「泣き叫ぶ歌曲」

日本の津波被害者追悼音楽会 サンクトヤコビー教会

リュベック:ひとは2回死ぬと日本のことわざで言うそうだ。一度は本当に死んでしまう事。二度目は亡くなった方を生きている人が忘れてしまう時。リュベックのヤコビー教会でこの忘却に反対する音楽が演奏された。日本のための慈善音楽会と題して第5回目の室内音楽コンサートがリュベックとキールのオーケストラ団員の発案により行なわれた。

2011年3月に日本で起こった事を忘れること無く、音楽会で集めた募金を津波で地図から消え去ってしまうような小さな町に送ろうという主旨だ。東京から約400km離れた女川の町には、約1万人の住民が住んでいた。しかし、今は、数少なくなった。あれから2年が経ち、住民たちにとっての悪夢が現実となった。

この自然災害で1500人が亡くなり、家を失くした人は6000人にのぼる。教会に展示された写真はまるで戦禍の風景であるかのようだ。日本の人々は、この自然による戦いを挑まれたことを事実として受け入れ、そして再復興をゆっくりと始めた。

このコンサートは満席ではなかったが、聴衆と音楽家の距離は取り去られ、互いの思いやりの心で満たされ、音楽により空間はひとつになった。アンドレア・シュターデルは、現代作曲家のアリベルト・ライマンの編曲によるシューマンの6つの歌曲op.107 とシューベルトのミニオンをソプラノと弦楽四重奏で歌った。彼女の躍動的な声と彼女を支えるかのように繊細でしなやかな弦楽四重奏は聴衆の心を動かした。:バイオリン:石踊えり、郷地理恵、ビオラ:クリスチャン・ユンキッシュ、チェロ:ハンスクリスチャン・シュバルツ。

シューベルトのロザムンデ弦楽四重奏曲もたおやかでありながら、また、力強いパッセージではしっかりと包み込むなど、細かく造形されていた。

この夜の取りでありクライマックスはソプラノと弦楽のための久保摩耶子の作品「三陸の歌」が飾った。弦楽四重奏はコントラバスのダグマ ラーブッシュが参加して弦楽五重奏に拡大

された。ミヒャエル ニュンデルの熟練された指揮のもとに紛れもない驚がくが奏でられた。松平盟子による3つの詩「余震」につけられた作曲は雄々しくもあり、泣き叫ぶようだ。同時に深い悲しみであり、なんども息が詰まるようでもあった。

この音楽が終わった時、教会はまったく静寂に覆われた。たぶん地震のあとの女川の静寂のように。コルネリア シュオーフ